



新毎日

6月1日(水)

2022年(令和4年)

発行所:東京都千代田区一ツ橋 1-1-1
〒100-8051 電話(03)3212-0321

毎日新聞東京本社



水を目に見える場所に

2022年6月1日、LIFULL TABLEで、WOTA株式会社の前田遙介社長に今、地球が直面している水問題についてお話を伺った。その中から、私達が特に感嘆したことを紹介したい。(三河尻優葵)

「遠い水」から

「近い水」へ

「レジリエンス」。何が起こっても、立ち直って何とかやっていく力のことだ。それを可能にするため、遠い水から近い水への変化が必要になる。今まで、私達は遠い場所から水を引っ張ってきて使っている。しかし、このまま同じことをやろうとすると、コストと人口問題の関係上、いつかは難しくなる。そこで、今は逆に遠い水から近い水への変化が必要なのだ。「遠い水」とは「大規模集中型(上下水道)システム」、つまり浄水場・下



水処理場を使うシステムのことだ。特徴は、数十年かけて建設すること、災害に弱いこと(リスク集中)など。これに対し、「近い水」は、「小規模分散型水循環システム」のことであり、1日で設置でき、断水が起こっても水の供給は止まらないため、災害に強い。(千葉真)

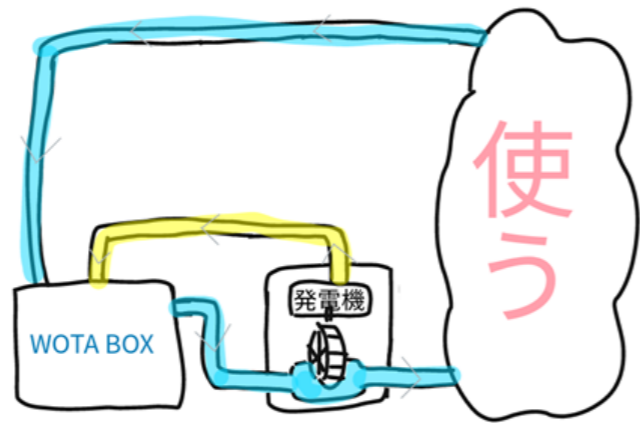
重みの増す水

皆さんは水ストレスという言葉を知っているだろうか。これは一人あたりの年間使用可能水量などから算出される水の使用量についての目安だ。水ストレスが高レベルになっている国はなんと37カ国もある。日本では一日あたりどれくらい水を使っているかを計算すると、日本の人口1億2800万人で4224万リットルの水が使われているそうだ。日本でこの量だと考えたら、地球では2050年には今より20億人の人口増加が見込まれるそうだが

ら、水不足が叫ばれているのも納得だ。日本では水にあまり困らず、蛇口をひねればいくらでも水が出てくる。それは当たり前だと思われているが、それは人と自然の共同の成果。WOTAもこの伝統を未来へつなぐのだと話していた。(高橋祐子)

近い水への道のり

これからは近い水にするために、災害時、1カ所に被害があったとしても、被害が広がらず、個々に対応でき、効率的に水を供給できる必要がある。それを解決する一つの方法が



水と電気

私たちの生活に欠かせない電気も、どこかの一拠点から出ているものだ。現在ある発電方法では将来性がなく、欠点がある。例えば、太陽光発電。太陽光パネルを屋根に取り付けるだ

「WOTA BOX」である。特徴として、98%再利用という浄化して循環する新たな方法が用いられていることがある。例えば、2人分の水量で100人がシャワーを浴びられる。そうすれば、新たな水を使わず循環して使えば水節約にも役立つ。私達は他にも自然の雨水などを利用してろ過してきれいな水を作り出すことができるのではないかと考えた。たくさん水が取れるとは限らないので、効率的ではなく欠点もあるが、水を浄化するためのエネルギーをあまり使わず、環境にも優しいのではないかと。(大島千明)

けで発電することができるが、曇りの日や雨の日はそううまく行かない。では、家庭にも設置でき、コストも低い発電機を何とか作れないものか。そこで私達は水力発電を提案する。WOTAの水が落ちるスピードで発電は可能ではないだろうか。WOTA BOXは電気がないと動かないという欠点はあるが、これで電気もWOTA BOXで完結できるようになるだろう。だがこれにも欠点があり、収納性が低くなることと、費用がさらにかかるということだ。(真下涼、植村羽南子)